

「あゝ腰いてえ…」

俺の名前は古川 太一

今はマンションから出ていくために荷造りをしていた所だ
と言っても引越してみたいなおめでたい話ではない

俺はここ一年会社でつまらないミスを何度も繰り返して
その結果クビになってしまった
お蔭様で

家賃が払えなくなり出ていかざるを得なくなったのだ

「はあ…何やってんだか俺は…」

恐らくクビになったのはミス自体より
仕事に対する熱意が欠けているからだろう
俺自身も自覚があった

それというのも俺はある失態が原因で
何をするにも身が入らなくなってしまうのだ

「はあ、なんで俺はあんなことを…」

俺は天井を見つめながら過去を振り返り始めた



俺には幼馴染がいた

吉田 夏姫 (なつき)

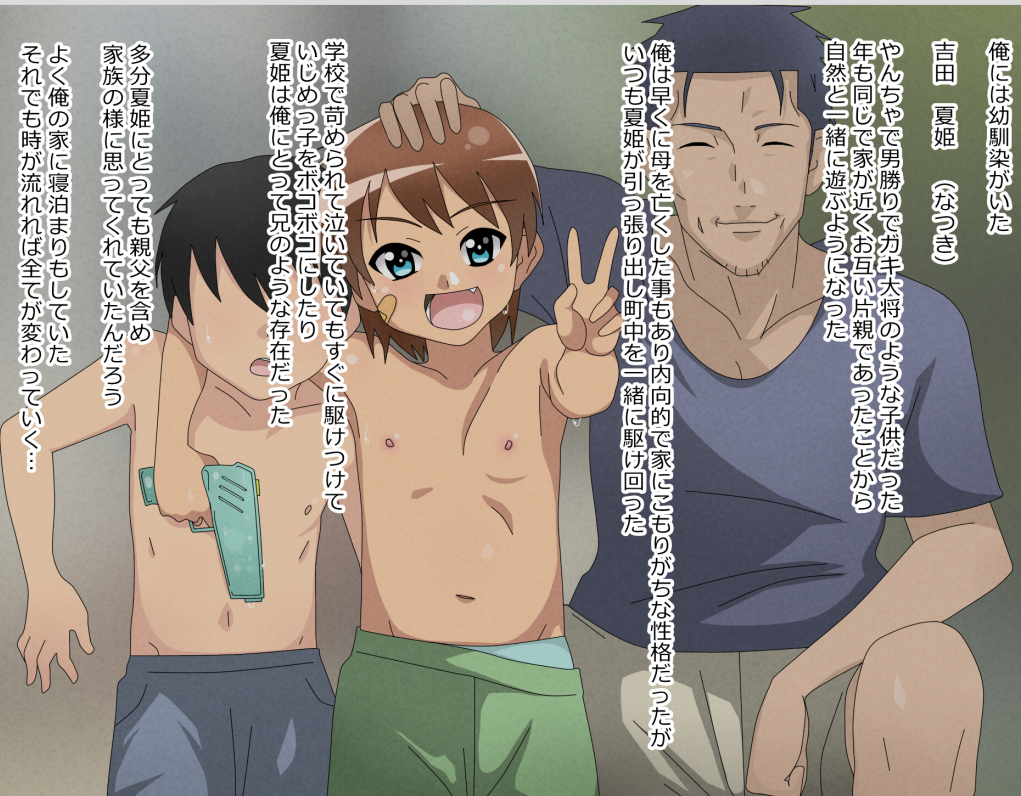
やんちゃで男勝りでガキ大将のような子供だった
年も同じで家が近くお互い片親であったことから
自然と一緒に遊ぶようになった

俺は早くに母を亡くした事もあり内向的で家にもりがちな性格だったが
いつも夏姫が引っ張り出し張り出し町中を一緒に駆け回った

学校で苛められて泣いていてもすぐに駆けつけて
いじめっ子をボコボコにしたり
夏姫は俺にとって兄のような存在だった

多分夏姫にとっても親父を含め
家族の様に思ってくれていたんだろう

よく俺の家に寝泊まりもしていた
それでも時が流れれば全てが変わっていく…



年月は夏姫本人が自覚が無いまま一陪女性らしい体つきに変えていった

自身を女性として意識しない夏姫は

眩しい太ももや豊かな谷間も気にせず見せつけて来る

当時の思春期真っ盛りの俺には目の毒にしかならず

否が応でも女性として意識させられていった

しかし男兄弟として過ごした時間があまりに長かったために
すぐには女性として認めるのは素直にできなかった

純粹に兄的存在に性的興奮を覚えるのは何か負けた気がして
意地にもなっていた部分もあったと思う

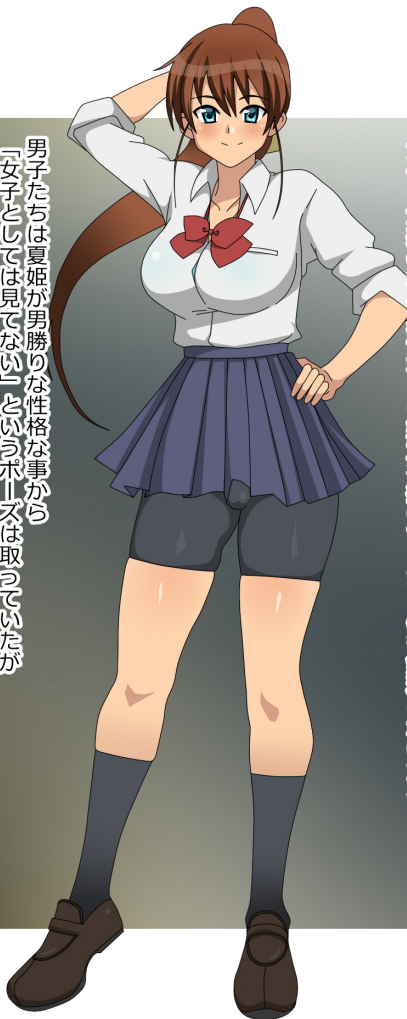


夏姫は同学年の男子にも人気があった

他の女子と違い顔の良し悪しで差別せず
誰とでも分け隔てなく接するからだ

休み時間には男子に混ざり一緒に球技で遊んだり
ゲームの話題で盛り上がったりと

女子に免疫のない男子などは好意を抱いてしまうのも無理はないだろう



男子たちは夏姫が男勝りな性格な事から
「女子としては見てない」というポーズは取っていたが
明らかに揺れる乳房やスバツツに包まれたお尻をガン見していた

一体何人が夏姫をおかずにしてオナニーしたのか想像すらつかない

クラス男子が涎を垂らしながら夏姫を眺めているのを見て俺は密かに優越感に浸っていた

あれだけ女性として見るのを抵抗しながらもどこか認めていたのだから自分自身の気持ちを

そして根拠のない夏姫に対する独占感



今はお互い時期じゃないがいずれは俺たちは付き合っただろうなそんな漠然とした未来を信じ切っていた

焦る必要を感じなかったんだ余りに近すぎて、それがいけなかったのか…

夏姫は親父に体を許していた

当時の事を思い出すと胸が苦しくなり目頭が熱くなる
そして俺の気持ちとは裏腹に興奮を覚えてしまう
今でも思い出してはオナニーしてしまうくらいだ

一体何が切っ掛けで？何時から？

俺は何一つ分からず嗚咽を漏らさないように必死に手で抑えていた
夏姫と俺は付き合っていたわけではないが当時の俺は
親父に奪われたと怒りを覚えた

しかし俺はその怒りを飲み込んだ

親父は早くに妻を亡くしそれでもずっと男手一つで俺を育ててくれた
でも本当はずっと寂しかったのだと思う

俺には幸せそうな親父から夏姫を奪う事なんて出来なかった



そして夏姫は在学中に妊娠し
親父と結婚した

俺は自分を殺し二人を祝福した
それが俺にできる唯一の恩返しだと思ったから



そして夏姫のお腹の赤ちゃんはみるみる大きくなっていく
俺は夏姫の中に親父の子供がいると思うと頭がおかしくなりそうだった

俺は生まれるのを待たずに家を飛び出した
二人の子供を見たら俺の何かが壊れる様な気がしたから…

そしてバイトをしながら大学を卒業し
会社に勤めるようになった

家を出てからは一切電話には出なかった
声を聞くのが怖かったからだ
せいぜい最低限のメールを返すだけで
ろくに会話などしていない

正直に言えば不貞腐れていたんだと思う

「俺より親父が良いんだろ
俺なんか居なくてもいいんだろ」

電話が鳴っている時も
そう思いながら鳴りやむまで耐えていた

「ぶん、ざまーみろ」と
そんな小さい自分が嫌で情けなくて
ほんとは無性に声が聞きたいのに！

給料の半分は実家に仕送りをした
それでもしないと罪悪感で押しつぶれそうだった

幼馴染は家庭を持ち子供を産んで
どんどん大人の階段を昇っていく

だというのに俺は…

俺は夏姫を忘れようとスープで童貞を捨ててみたが
残ったのは虚しさだけだった

そしてルーチンワークの様な生活を続け
家を出てから9年が経過した

久しぶりにメールを読んでいると
目を一瞬疑った

親父が死んだらしい

今からでも葬式に間に合うかもしれない
俺は実家へ急いだ

移動中いろんな思いが交差する

『親父！』

俺の前では一切弱音を吐いた所など無い
何時も「」「」と俺を見守っていてくれた

対して俺は決して良い息子じゃなかった
母が居ない事できつく当たったり

欲しいものが買ってもらえなくて泣きわめいたり

俺は親父を一人の男として尊敬していた
いつかは俺が養ってあげて恩を返すんだと

でも夏姫のことで親父への感情が分からなくなった

怒り、憎しみ？、愛情、感謝？

恐らくすべて……

（でももう親父には怒る事もお礼を言う事も出来ないのが……
もっと向き合うべきだったのか？

でも当時の俺に何が出来た……

いや、俺はあの頃から何も変わっていない
俺の時間は家を出た時から止まったままなんだ……

そして実家に着いた頃には日が沈み切っていた
既に弔問客らしき人がぼつぼつと帰り始めている

親父の関係者らしい人や顔見知りの同級生もいた
俺は気づかれぬよう去るまで隠れることにした
すると過ぎ去り際に会話が聞こえた

『いや、古川の奥さん色っぽかったなあ』

夏姫の話をつづける。

「ああ、確かにすげえ良い体してたなあ
オッパイもデカかったしなあ」

親父の葬式でそんな風に夏姫を見ていたのかと思うと
イラついたが気持ちに分からんでもない

「良いよな、あんな嫁さんもらえて
毎晩やりまくりだったんだろな」

(。。。)

「喪服姿つてのも良いしなあ…」

古川もあんだけベツピンさんを

「二回も孕まじや悔いはないだろう」

「はは、違いねえ」

(ようやく過ぎていった

くそ…)

考えないようにしてたのに)

出来るだけ誰にも会わない様に裏回に回る

①「回か？、二人目産んだのか？」

もしかしたらメールで読み飛ばしてたがもしれない

俺は夏姫には会う気はない

線香をあげたら香典を置いてすぐ去るつもりだった

(だってそうだと自分の親父なのに

何から何まで任せっきりだ

本当に合わせる顔が無い！)

恐らく座敷に骨壺があるはずだ

薄暗い部屋の中を見渡していると

パチツというスイツチ音とともに部屋が照らされる

「どなたですか…？」

「太一……」

俺は思考が停止した
9年ぶりの夏姫の声

姿を見るのも9年ぶりだが
以前より女性らしくなり俺は思わず見惚れてしまった



「太一、よね……
来てくれないかと思った……」

「ああ……、すまん忙しくて、遅れた……」

いけない……

声を聞くだけで涙が出そうだった

「元気にしてた……全然声を聞かせてくれないんだから」

「あ、ああ、ほんとに忙しかったんだ……」

「寂しかったんだよ、幸太郎さんも会いたがってたし……
焼香、あげていってくれるよね」

「うん……」

「親父本当に死んじゃまったのが……
今になって実感がわいて来た」

「太一少しやせた……？
ちゃんとご飯食べてた？」

「はは、お母さんみたいなこと言うなよ……、あ」

「うん……、お義母さんだよ……」

夏姫は傍げに笑う



(そうだった、な！)

急に現実に引き戻された感じがした

俺は喪服姿の夏姫を舐めるように見る

頭によぎるのは先ほどの名も知らぬ二人の会話だ

毎晩やりまくり、二回孕ます、

「ん〜」

「ふうしたの、太二？」

久しぶりの再会ゆえか未亡人というシチュエーションがそうさせるのか
夏姫の喪服姿に背徳的な興奮を覚えている

何よりももう親父がいないという事実がトリガーとなり
何年もため込んできた気持ち
決壊したダムのようにあふれて止められなかった

「夏姫…!!!」



「きゃあ……」

俺は夏姫を押し倒し力づくで着物を崩していった
胸元を開けると
ブルンと大きなハストが露わになる

「はあはあ……こんなまじかに……夏姫の……大きい……」

（もう良いだろう……もう親父はいないんだから夏姫を俺の女にしたって……！）

「すううう……はああ……」

思い切り谷間に顔を埋め深く空気を吸い込む
フエロモンの甘い香りと微かに感じる汗の香りが鼻孔をくすぐる
脳がひりつくほどの快感が流れる

すでに俺の下半身はパンパンに膨れ上がっていた

「だめえ……、太一……どっしてこんな事……」

「はあはあ、夏姫、夏姫……！」

念願の幼馴染との性交を前に理性の欠片も残っていないなかつた
俺は夏姫の抵抗を無視しシヨーツを脱がせていく

「お願い、やめて……太……！」

「うるさい……！どうせ親父とやりまくってたんだろ

俺と一回ぐらい……！」

恥も外聞もなく長年ため込んでいた本音がこぼれていく

「……！」

俺はペニスを夏姫の股下へと擦り付ける

生温かい体温が心地よく亀頭にピリピリと快感が走る



徐々に夏姫の抵抗が弱まっていき
俺は勝手に自分を受け入れたのだと解釈した

くちゅ、くちゅ…

徐々に夏姫の性器が水音を立てはじめる
しかし聞こえるのはそれだけでは無かった

「…ひっく…ひっく…」

夏姫は泣いていた

俺は涙を目にし思わず我に返った
そして自分が今何をしてしまったのかをようやく理解した

「幸太郎、さん…」



「違う、違う！、俺は……、うわあああ……」

俺は必死にあの場から逃げ出した

気付けば暗闇の道を走っていた

ここまで逃げた記憶が一切思い出せない

「俺は……取り返しのつかないことをしてしまった……」

やっぱり夏姫に会うべきじゃなかったのか？

（久しぶりに話をしたり

姿を見ただけで凄く幸せだった

なのに、なのに俺は……）

もうこんなことを合わせる顔が無い

（何であんなことをしてしまったんだ……

もう、死んでしまいたい……）

何でこうなってしまったんだろう

俺の人生は何処で狂ってしまったんだ

やり直したい、今日を

いやもうと前だ、夏姫が親父にとられる前に

俺の今の気持ちをぶつけられていたら……

（いや、よそう……）

こんなありもしない話に逃避するのは虚しい

俺は現実を受け入れなければいけない

親父を亡くしたばかりの夏姫を

俺はさらに傷つけてしまったんだ

あれ以来俺は今日の出来事を夢に見るようになった

そして今に至るわけだ

何の気力も湧かず仕事をクビになり
次の仕事も思うように見つからず

仕送りに給料の大半を使っていたことから
貯金もすぐに底をついた

「ふう、これで引越し荷物は全部か
後は届け先を書いて…」

元々部屋に置いてある物もそう多くはなかった
そしてこの荷物のお届け先は

実家だ！

マンションを追い出されることになった俺は
恥を忍んでメールをした

仕事をクビになった胸を伝え
しばらく住まわせて欲しいと

返事が無いようなら俺は公園でも野宿するつもりだった

だが返事は2〜3分程度で届いた
そのメール内容はこうだ

「了解、いつ頃来る？」

返事が来ると思わなかった俺は
困惑しながらも返事をした

(夏姫、俺を許してくれたのか……)

引越し先が見つかり不安材料は二つ消えたが
また悩みのタネが出来た

「さあ、そろそろ行くか…はあ…」

憂鬱だ、どんな顔して挨拶しようか

あれから一年経ったとはいえ

俺はレイプ未遂をしてしまったんだからな

ああ、考えるだけで胃が痛くなる

(早く仕事見つけて迷惑かけないようにしないと…)

こうして俺の新生活が始まろうとしている

正直先の事を考えると不安な事ばかりだが

何故だろうか

この時ようやく俺の中で止まっていた時間が
進み始めた気がした…



幼馴染は
親父のお古

夏姫の唇を奪う
唇に柔らかい感触が感じる

「ん…ん♡」

俺はむしゃぶりつく様に唇を味わう
まだ粘膜に残るアルコールの香りが尚更興奮させる

「ふ…ふ…」

(俺のファーストキス！)

どうしてもセツクスする前に

夏姫で卒業したかった…)

かつて俺は結婚式で夏姫と親父がキスするのを見せつけられた
それでも二人のためかプライドゆえか笑って見送った

(もう何も我慢しない！
誰にも邪魔させない！
俺が一番夏姫を愛してるんだ……！)

その時だった

「んっ、ちひの(太)……」

「……」

んちゅんちゅ……♡

(起ってしまった？、まだセックスしてないのに……！)

頭の中で止めるて謝るべきか？

そんな考えが浮かんだが

もうチャンス逃したくなかった

(最後までいく、後の事は考えない……！)

「んむ…ごめん」

黙らせるかのように舌を入れ舌同士でぐるぐる回す
舌が性感帯であるかの様に
摩擦する度に電流が走りペニスがかウパーに塗れていく

「ん…むちゅ…♡、らめ…、太…」

駄目だよ…、私、あの子達のお母さんで…」

「はあはあ…、むちゅ…んむ…」

夏姫を無視し口内を攻めまくる

「らめらの…♡、こんなキスしちゃ…」

私あの人のモノなんだよ…

貴方のお母さんなのに…んむ♡」

れるれる…♡

「はあはあ…、関係ない
今夜お前を俺の女にするんだ…!」

俺は宣言し再び夏姫の口へと侵略する

「はあはあ…♡、そんな…♡
だめだよ…」

はあはあ…♡

そう言いながらも
夏姫は抵抗しないどころか
むしろ舌を絡め始める
すてにお互いの唾液が混ぜり合いでドロドロになっていた

「なっ…夏姫…!?!
それに相手は…親父…?」

「あん…♡、やっと起きたの太一…♡
今ね幸太郎さんと赤ちゃん作ってるの
それを太一に見せつけてあげようと思ってる…♡
今度は目を離しちやだめだよ…?」

「な、何言ってるんだ…!
ふざけるなそんなの見たくない…!」

ぱんぱん…♡

ぴしちゅぴしちゅ…♡

目線を逸らそうとするが身体がいう事を聞かない

「無駄だよ太一…♡
太一は大人しくセンズり扱きながら
私達の交尾を見ててよ…♡」



106min

REC

TCG

画面内ではセーラ戦士にコスプレした夏姫に
親父は赤子の様に甘えていた

痛々しいと思うと同時に羨ましくもあり
複雑な気持ちだった

「オツパイ美味しいでちゅか...♡
そんなに服の上から吸っちゃって...♡」

「んん...♡」

ちゅくちゅく...♡

「はあはあ...!、くそお...!」

(夏姫の胸を吸いやがって...!)

TLCS STD

On
Full Auto

CH1
CH2

「おチンポをこんなにも固くしちゃって…♡
いけない赤ちゃんでちゅね…♡」

「ちゅばちゅば…♡、ママ…♡」

「はあはあ…!」

(何がママだよ…、
こんな年下に母性を求めるなんて…!)

だが親父が夏姫に甘えたいという気持ちは分からなくもなかった
俺自身にも幼馴染に対して母性的な物を感じてしまう時がある

くちゅくちゅ…♡

「ママでこんなに興奮しちゃったの…?」
いけない子だね…♡
そんな子はお手手でお仕置きしちゃうね…♡」

「ママに欲情しちゃうのは「ママ」ばっちいお汁が溜まっちゃってゐるからなのよ……?」
だからママの手でいっぱい「キ」「キ」して抜いてあげます……♡」

「ふうふう……♡、ママ、ママ……♡」

「はあはあ……!」

畜生……、羨ましい……!」

つい本音が出てしまう

♡……♡……♡……♡

「夏姫……! もっと、もっと強く吸ってくれ……!」

俺は夏姫に話しかけるが
その相手は画面の夏姫ではなく……



「Daaaaa~♡、Daaaaa~♡、Daaaaa~♡、Daaaaa~♡、Daaaaa~♡」

テーブルの下にいる夏姫が俺のペニスに激しく吸いつく

「ああ…♡、はあはあ…♡、ふう…
良いよ…続けて…」

「Daaaa~♡、Daaaaa~♡」

俺は夏姫にピデオを見ている間性処理してくれとお願いした
それもピデオの中の夏姫と同じ格好で

どうするの？で親父との思い出を上書き出来ると思ったからだ

「じゅるる…♡、れるれる…♡
太一…、気持ち良くなってるね…♡」

「ああ…、そこお…！」

（こんな行為、人として歪んでいると思う
でもこうしている間は夏姫を親父から
取り戻したような気がして満たされていた）

れるれる…♡

夏姫は本当は過去の自分を見られるのが嫌なはずだ
だがそれでも俺に丁寧に奉仕してしてくれた

（ゴメン夏姫…、こんな酷い事させて…）

「幸太郎さんのおちんちんは凄いんだよ…♡
太一の早漏弱小ペニスと違って私をいつも満足させてくれるの…♡」

「止める、そんな事言わないでくれ…!」

(なんで動けないんだ…?、逃げ出したいのに…)

「でも太一は悪くないの…
私はこの9年間毎日幸太郎さんとエッチしてたけど
その間太一は自分の手で慰めてたんだもんね…♡
かわいそ♡」

ぱんぱん…♡

「わあ…!、止めるお!ちくしよおおお…!」

必死にもがこうとするがが二歩も動けない

「あっ…♡、幸太郎さん射精しそうだって…♡
今度はちゃんと目に焼き付けてね
私の子宮が幸太郎さんのものになる所を…♡」

「ぶっ…♡」


ぽんぽんぽん…♡

ぽんぽんぽん…♡

「ほら来ちゃりよ♡…♡
幼馴染のおまんこお父さんで盗られちゃりよ♡…♡」

「ぶっ…♡」





幸太郎のペニスは子宮口をしつこく舐り
直接精子を送り込もうとしている

(見たくないのに瞼を閉じても見える……!)

夏姫の中を掻き分けペニスが
ピストンしている所を見せつけられる